

悲しみの集中豪雨

忘れ得ぬ九月十日の記憶

尾鷲市立輪内中学校

表紙版画 桑 木 富 子
題 名 安 下 地 加奈美
三 鬼 あつ代

目 次

発刊のことば		
秋 出 水	学校長	栗 原 敏
【亡き友への言葉】	短かった生命	一C 大 川 奈 美
	岳洋君よ	三B 浜 田 桂
	雨の中へ逝ってしまった友	三A 下 地 加奈美
	山つなみ	一B 小 川 祐
【逃げまどった夜】	集中豪雨の日	二B 小 川 真 治
	家を流されて	一A 大 川 いさほ
	へびのような山くずれ	二B 藤 木 宏 明
	だれがこんなことをしたのか	一B 原 田 良 子
	もう一歩であぶなく	二B 庄 司 利枝子
不幸をおよぼした夜	二B 榎 本 英 人	
大川利治さんの手記		大 川 利 治
(誌) 友よさらば	三B	荒 木 美 治
【友よ安らかに眠って.....】	あとに残るのは悲しみだけ	三C 大 川 綾 代
	信じられない	一B 村 上 尚 美
	岳洋よ安らかに	三C 大 川 信 明
	さよなら岳洋君	三B 三 鬼 千 恵
	帰らぬ友	三B 小 川 公 明
	神様はどこに	三C 三 鬼 ほ ず
	自然の力のこわさ	三A 大 川 さおり
天災への怒りと悲しみ	三C 大 川 玉 穂	
古江町被災者住宅での聞書		
忘れられざる悪夢の雨	三A	中 村 公 郎

記 録	恐怖の思い出と	九月十日わたしの記録……………	二A	高野 淳子
		どろだらけのおにぎり……………	一A	久保 康江
		逃げる場所なんてないのに……………	二A	大宮 啓子
		不安な長い夜……………	三B	大川 早人
		九月十日のじごく……………	一C	三鬼 よみ
賀田被災者住宅での聞書……………				
		川が道より高くなって……………	二A	大川 英治
		家、砂、石……………	一C	庄 司 志賀
		覚悟をきめた夜……………	二B	森岡 孝子
		はだしでとびだして……………	一B	庄 司 加保
		運命……………	二A	大川 聖子
		きょうふの思い出……………	一A	伊原 雅彦
		集中豪雨の恐ろしさ……………	一A	榎本 政則
		夢であればいいのに……………	一C	大川 真理子
		集中豪雨の足跡……………	三A	浜中 輝一
		三時間もうまっていたわたし……………	一C	大川 美奈穂
		編集後記……………		
		救援ありがとう……………		

発刊のことば

昭和四十六年九月十日、信じられぬ災害が当地方を襲った。緑の美しい山は、降り続く豪雨の為に突如として裂け、激しく荒ぶれた。

人も家も畠も道も、一瞬にして埋めつくし、流しつくし、人々を恐怖と絶望に沈めた。

そして、わが輪内中学校は、二人のかけがえのない若い生命を無惨に失った。

学友を失った生徒の悲しみ、教え子を奪われた職員の悲しみ、二度とくり返してはならぬ。この悲しみを永久に記憶し、若くして逝った霊にもささげるため、この文集をつくらんと決意した。

文章・編集は拙いが、行間ににじむ切実な祈りをくみとって頂ければ幸いである。

秋 出 水

学校長 栗 原 敏

「誤報であってほしい。間違いであってほしい。」電話は不通となり、すべての交通路は途絶し手も足も出ない状態のとき、幸いにも医師を派遣する巡視船のある事を耳にし、頼んでこれに同乗した。

「生徒も死亡したらしい。」という氏名まで挙げての情報が誤りであってほしいと、激浪にもまれながら、風がうなり雨箭のみが光る暗黒の海に、ひたすら祈念しつづけた。

その日、九月十日、生徒たちの安全を期して午前中で授業を打切り帰宅させた後、要件があって教育委員会へでかけ、午後四時ごろ帰途についたが、すでにその道は絶たれていたからである。

浮遊物の充満する古江港に巡視船のサーチライトの照射に誘導されつつ上陸し、懐中電灯を頼りに負傷して足を切断しなければならないかも知れぬといわれる生徒を病院に見舞ったあと、死亡したらしいという生徒の安否をたずねまわったが、祈念した一縷の望みも無惨に打ちくだかれ、間違いでなかったことを認めないわけにはいかなかった。

「あの生徒が・・・・・・・・」

その日の午前中にはあんなに元気であったのに、一体どうしたことだということか。どこがどうなってこんなことになってしまったのか。それでもまだ信じられない。信じたくない。未練か。天を仰いで長嘆息し、茫然自失した。

疑心暗鬼のまま、それでも学校へ急いだ。学校に至る賀田の町の惨状は目を覆うばかりである。一面泥の海と化し、あるところは濁流となり、想像できないことではあるが、一気に押し流された無数の巨岩は身長三倍もの高さで眼前に迫り、飛散した家屋の屋根や柱や布団などがそこに見られる。泥水は足を奪い腰にまでズブズブと達し頑強にその通行をさえぎる。

かろうじてたどりついた学校には百数十名以上の人たちが着の身着のまま避難していた。いのちからがら、やっとの思いの避難行であったことは歴然としている。動くことさえかなわぬ負傷者も幾人かいた。

夜明けとともに動いた。災害を集中的に受けた賀田・古江両地区生徒およびその家族の安否確認、家屋家財等の被災状況の調査、登校不能になった三鬼浦・梶賀両地区生徒それに曾根地区生徒達の掌握と連絡網の確立、これらのことは緊急を要した。が、通信も交通も全滅しているため難渋を極めた。

自分自身災害を受けたものも含めて全職員は生徒の家庭を訪ね、流失していればその避難先を捜してたずねあて、その状況を聞いてまわり、更に救援作業にも加わった。

生徒たちも学校の指示以外に自分なりに判断して、手のすく者は、親戚へ、近

隣へ、知人へ、友人へと救援に馳せつけ、土砂の除去、掃除、洗濯などに積極的に働いたと後日耳にした。

学校にはそれ以外にも仕事があった。自衛隊の前線基地として数百名の隊員を受け入れる宿舎の貸与とその応接、学校の授業再開対策、通学不能の三鬼浦地区生徒に対する臨時分校開設とその教室と派遣教員の処置、校舎使用不能の賀田小学校への教室提供、更に三木浦臨時分校を閉じての船での通学開始等々、この一ヶ月間は奔命した。

この間に古江・賀田両町の悲しみの中にも盛大な合同葬が執行された。

台風二十三号(八月二十三日から三十一日まで)は五百五十九ミリの雨を降らせ、九月に入っても晴天は一日だけで、更に九日からの雨は一〇九五ミリに達し、この豪雨は山津波となり、土石流を呼び、古江・賀田両町だけをみても死者二十六名、負傷者二十八名、住家の全半壊五十三戸、床上浸水百二十三戸という未曾有の大惨害を招いた。

生徒関係の被害は二名の尊い犠牲者を出したのをはじめ、四名が負傷入院しいまだに入院加療中のものもいるが順調に回復しつつあることは何よりである。父や母や家族失ったものもあり、その心中を察すると断腸の思いがする。

家屋や家財・学用品の流失など、その被災者は三十六名にも達した。職員のそれも四名におよんだ。

亡くなられた方のご冥福を心から祈り、被災した方々が一日も早く復旧されることを願わずにはいられない。

それにつけても、このたびの災害に寄せられた多くの人々の厚い情には感謝のほかはない。

見舞いにわざわざかけつけてくださる多くの方々のある一方、近くの学校、遠くの学校、児童会、生徒会。さらにボーイスカウトなど各種の団体、あるいは匿名の主婦の方々、卒業生やその職場の人たちから、その心をいただいた。

義損の金、運動会で受賞したノートなどの学用品、婦人会で世話してくれた学生服、その他、米、砂糖、薬品、酢、針や糸にいたるまで被災地でさしあたって困るであろう品物を送ってくださった。心のこもったものばかりであった。

そしてまた、一つ一つ心をこめて折ったであろう千羽鶴を激励の手紙とともにいただいた。手紙は学校の廊下に掲示し更にそれを冊子として回覧した。千羽鶴は、どうしても取り去ることができなくて置いてある死亡した生徒の卓上にその生徒の写真とともに同級の友だちの手によって飾られて、今もある。

これらの各方面からの尊い善意が災害を受けたもの受けないものを問わず、生徒ひとりのひとり心の奥底に生涯消えることなく感謝の気持ちとして燃えつづけ、いつの日にか、また、人にかける善意となって発現されるはずである。

生徒たちが自分達の手で文集の発刊を思い立ったよすがも、この秋出水の体験

と、日頃接することのない多くの人たちとの心の接触を重ねたことによって、新しい世界に目を開かされたが故であって、それが発点となって、さらに「生と死」について深く考え、「人生」を沈思しようとする手がかりを得たと信ずるが故に、生徒諸君の今後の研鑽に期待するところが大きいのである。

~~~~~亡き友へのことば~~~~~

短かった生命

一C 大川 奈美

古江町に山津波が、ドドッとおしよせてきた、ほんの一瞬の間に……。

その山津波のせいで十三人もの死者が出ました。けれど二人が助かっただけでも幸運でした。これは初めての事件でした。

私の大親友の大川メイ子さんが死んでしまったのもこの時でした。

その日九月十日は、私とメイ子さんとで下校しました四時間目の勉強が終わり給食を食べ終わるとメイ子さんがはいてきて、「奈美さん、私給食当番なんやわい、おそくなったら、一人で帰らんなんかもしれんから、まっといてくれる。」と、いったので、私はまっていました。そしてメイ子さんと帰るつもりで、教科書をカバンにつめてメイ子さんの所へいったら、帰るといったので。あわててレインコートをきて帰っていったのでした。ちょうどまさご屋の前までいったら、バスがきたので、わたしが「乗ろうか。」と、いったらメイコさんは「いや。」と、いってさっさと歩いていきました。

歩きながらメイ子さんが、「奈美さん、明日かぜをひいて休まんならいんさか先生にゆうといて。」と、いったので、「私こそ、ゆうといてくれい」と、ちょけながら帰り、「もしかぜひいたら先生のせいやり、バスに乗ったらあかん、といったから。」と、いいながらかえりました。

笑顔がわいていました。石切り場のあたりにくると、水がいっぱい流れていました。

古江町について、恵美子さんの所の下にくると「休んで行こか。」と、いうことでそこで休みました。休んでから、一心に歩き、「農協のところで、少しやましていけな。」と、いったら「やますねっついでい。」と、笑顔を見せて、ぜったい歩くと、いったように、てくてくと歩いていきました。

それが最後になりました。

メイ子さんは最後まで私に笑顔を見せてくれました。

私に対しておこったことなく小さいころからよく遊びました。

私の母と、メイ子さんの母とは、いっしょに仕事をします。

小さいころ、母たちがメイ子さんの家の近くで畑仕事をしているとき、私は昼一人になるからといってメイ子さんのところにべんとうをもって行って食べたりことしの夏休みは一緒に泳ぎました。テニスもしました。

いつも私の心とメイ子さんの心は同じ考えをしていました。

また、盆はいつもいっしょに遊び、花火大会もいっしょにいました。

私たちはじゅくに行っていないけれど、二年生からいっしょに行く約束でした。

夕方メイ子さんがゆくえ不明ときいた時、私はとてもショックでした。メイ子さんがいないなんてとても悲しいと思いました。

おかきを食べていると「よう食べるなァ」と、となりの子がいったので私は「メイ子の分も食べよんねり」といって食べました。

翌日、空はとてもすみきり、昨夜の事がうそみたいでしたが、友達にあってもそのことばかり話しあい、悲しみのあまり泣きたてるだけでした。

一人の親友がなくなったことに対して私はとてもショックです。

岳 洋 君 よ

三 B 浜 田 桂

九月十日、新開地が山津波で流されたという知らせを聞いた。

岳洋たちも生きうめになってしまった。それから数時間後に岳洋が見つかった。しかし、もう死んでいた。

信じられなかった、涙も出なかった。

次の日現場を見に行ったら、どこがどこなのかわからなかった。賀田もひどかった。その日、仕事を手伝った。石をどかせうまっている人をさがしてゆく。みつかると思えばが大変だ。手でほらなければならない。

はたで見ている人達の中から泣き声がきこえる。また一人、また一人、とうとう全員出た。

アッというまに、家が流され、友達が、親が、兄弟が、死んでいった。

「さきいくぞー。」

これが、僕が聞いた岳洋君の最後の言葉だった。

岳洋君は、家がかたむいてきた時、妹をかばったという話を聞いた。

やっぱり岳洋君だ。

岳洋君は、僕とこへよくとまりに来た。小学校の時は、よくふざけ合いをした。自転車で尾鷲へ行ったりケンカもした。そんなことも思い出となってしまった。岳洋君は、よく勉強をしていた。悪い遊びもしなくなり、ふだんは家でテレビ

ばかり見ていた。今年の夏休みは、あまりいっしょに泳がなかった。
彼はあんなに勉強をしていたのにそれなのにいままでやってきた成果もためさ
ずに死んでいった。

あんな大きな体だった岳洋君も小さなはこの中に入ってしまった。

岳洋君のお母さんも、僕が遊びに行くと「勉強しよんのかよ」などによく言っ
ていたのに……。

単車に乗って見つかり、庄司先生によばれ、にがい顔をしていた岳洋君はもう
いない。

雨の中へ逝ってしまった友

三A 下 地 加奈美

九月十日私達は突然、いや、ほんの一瞬に二人の友達をうしなってしまった。
一人は同じクラスの岳洋君、もう一人は同じバレー部で一年のメイ子ちゃん。
その日私は、岳洋君に、スタイルがいいとか、カッコイイとかいってからかっ
ていたのに、その時私達は死ということなど知らずに楽しんでいたのに……。

その日は雨がたくさん降っていたので授業は午前中だけで終わった。

私達は、いそいそと給食を食べ帰りたくをし、学校を出た。今思えばみんな
が学校でじっとしていれば岳洋君とメイ子ちゃんは、たすかっていたのにと悔や
まれてならない。

降り続く雨の中を私達はバスに乗って家についた。

夜テレビを見ていると、となりのすみちゃんが

「加奈美さん大変やり。」と声をはりあげてかけこんで来た。

話を聞くと、古江で山津波があつて、岳洋君とメイコちゃんが生き埋めになっ
たとニュースで言った、と言うのだ。私は何がなんだか信じられなくて、すみち
やんの言葉をうたがった。

からだが大きくて明るくてみんなの友達だった岳洋君、又明るくてかわいくて
クラブの時一生懸命頑張っていたのに、メイコちゃん今でも「ソーレ」というか
け声が耳にのこっている。

あくる朝私達は船に乗って古江に向かった。

その光景はあまりにもむごく残酷だった。

私達はすぐその足で山くずれのあった所に急いだ。そこにつき岳洋君の遺体が
見つかった事を聞いた。自然に涙があふれてくる。でもまだ信じられない私達は、
岳洋君の遺体を見に行った。

そっと白い布をとり顔を見る。みんな思わず声を出してないってしまった。まる

でやすらかにねむっているようで今にも「おはよう」と声をかけてきそうで、まだ信じられない。

でも私達がいくらなくても岳洋君は答えてくれない。笑ってくれない。本当に明日から岳洋君を見ることはできないのだろうか。岳洋君の笑顔を見る事はできないのだろうか。

九月十日古江で合同葬儀が行われた。

前の方に岳洋君とメイ子ちゃんの写真が立てられている。

少したつと信明君が生徒代表で弔辞を読むことになった。

いつまでたっても読む声は聞こえない。どうしたのだろうと思っていると、涙まじりの悲しい声が聞こえてきた。

「岳洋、メイコさん」と読むたびに信明君の目からは涙が流れ口からは、おしころしたような声がでる。

私達もみんな顔をふせ、涙を流す人、すすりなく人、声をあげてなく人、みんな岳洋君とメイコちゃんの死を、災害にあった人の死をかなしんでいるのだ。

これほどまでに好かれていた、かわいがられていた岳洋君、メイコちゃん、なぜ私達の前から姿を消してしまったのですか。

岳洋君初めて同じクラスになったばかりで折角同じクラスになったばかりでせつかく仲良くなりかけていたのに……。

メイコちゃん、ようやくバレーの練習にもなれ、頑張っていたのに……。

でも岳洋君、メイコちゃん、私達は貴方達の死をきつとむだにはしません。今後このようなことがおこらないように心がけ、二度とこのようなかなしい思いをしないようにします。それが岳洋君とメイコちゃんにできるただ一つに事だと思いうから……。

山 つ な み

—B 小 川 祐

ぼくといもうとは、おかあさんのあねの家に、一時ごろひなんした。

にいちゃんは学校へ行ってまだ帰ってきていなかった。

ひなんした家でラジオを聞いていたら

「ゴーゴー。」

と、いう音と同時に

「山つなみやー。」

と、いう声で二十人ぐらいこっちに走ってきた。その中に泣いている人もいた。

そのあと、タクシーにのせてむこうへ運んでいった。

おかあさんと、おとうさんが、カッパをきて走ってきた。

袋をかぶって、ちがう家へ又、ひなんした。

~~~~~逃げまどった夜~~~~~

集中豪雨の日

二B 小川直治

ぼくは、学校から来ておじさんの家にいった。

ぼくは、しばらくいたが、あまり雨がふってきたので家に来た。

そしたらおとうさんとおかあさんが、たたみを上げていたのでつだっていた。

テレビを上げたら中学校に逃げていくことになっていた。

しばらくしていたら汽車の来るような音がしたので外を見ようとしたら、鉄道でおじさんの人がなにかいっていた。

だが家に入ってテレビを上げていた。

そしたら、裏の家がぶつかってきてガラスがわれた。

おかあさんと、おとうさんが外にはしっていったのでぼくも外に出たらなにかにひっかかってころんだ。

足がなにかにはさまれたのでぬこうとしたら水が来て、ぼくはいっしょにながされた。

ながされているとき、ぼくは上にあがろうと自転車の間から音を出したらおとうさんがいてつかまえてくれた。

おとうさんとぼくは、いっしょにながれていった。

コンクリのへいにつかまっていたら、おかあさんがきてひっぱってくれた。

中学校の運動場の所に来たとき、宏明君のおかあさんがきて、ぼくの足がきれて血が出ているのを見てバスタオルをもってきて足をしばってくれた。

学校にきたら平山先生がすぐ保健室につれて行ってベッドにねかしてくれた。

かんごふさんが来てキズのであてもしてくれた。

すこしたらおじいさんはむねをうったのかくるしいようにしていた。

救急車が来てぼくとおじいさんがいっしょにのって、おかあさんがつきそいのって尾鷲にきた。そのとちゅうは雨がよくふっていたので、ぼくは、くずれてくるような気がした。

橋をわたるとき救急車がとまってパトカーの所に行ってきたからそろそろ橋をわたった。

尾鷲の市民病院に入院したあくる日賀田と古江の集中豪雨にあったひとがたくさん来た。

ぼくは、入院しているときに、もうこんな目にはあいたくないと思った。
友達の人や、しんせきの人が出てくれたのでとてもうれしかった。

家を流されて

一A 大川 いさほ

十日の五時ごろ恐ろしい山つなみにあった。

わたしの家はいちばんさきにこわされた。いまから三百年前にも、山つなみがあったということを前々からおかあさんやおとうさんにきいていた。

その日は、雨がいつときも小雨にならずおなじちょうしでふりつづいていた。
わたしたちはもう少しで、なくなるところだった。

ひっしになってにげた。はしっているのか、あるいているのかわからなかった。
家は大きな石と水でひとかたもなくながされた。

その夜はねむれなかった。ようやく雨もやんで、よがあげた。九時ごろながれた家をみにいった。

家を見に行ったとき大きな石が沢山あった。まだ人がみつからないとさがしていた。

そのときはみんなたすかったのだと思ってほんとはよかったなあとおもった。

そのあと家はなにも手をつけられないので、一日目は手をつけなかった。

おかあさんもきぶんがわるくてよこになっていた。

その夜はぬしえおばあさんのところへとまったが、ながれたときの音をおもいだして、ぜんぜんねむれなかった。

朝も六時ごろからおきて、ながれた家にかえった。

そのひるごろ、おねえさんたちがかえってきた。

おねえさんも家がなくなっているのをみて、きぶんがわるくなって一日ねこんだ。わたしもきぶんがわるくなってきた。

この日のおそろしさは何年たってもわすれられないと思う。

へびのような山くずれ

二B 藤木 宏明

九月十日 金曜日

雨千ミリのため、川水はふえて、堤防からこえはじめていた。その時、山の上のほうから白いものが見えたと思えば、すごいおとがした。なにかがくずれるような、すごいおとだった。

その時、家が水やどろにおし流され、くずれ始めた。

そのくずれ方は、へびみたいに、くにくにくにやして、くずれた。そのくずれた後で、小さな子どもが、中学校へつれられてきた。その子は、泣き、母をよんでいた。直治君もおじさんにおぼれて、中学校にきた。少しして英人君もきた。後から、後から、けがした人がきた。

そのあくる日、自衛隊がうまってしまった人をさがした。

そのな中で一人だけ生きていた。

小学校も、すごくあらされていた。

だれがこんなことをしたのか

一B 原田 良子

ふり続く雨、なんのうらみがあつてこんなに降り続くのかと思った。

夕方近く、あまりの雨に私達家族はひなんすることを考えた。

それから少したつて夕ごはんをたべ時間がたった。

いったい、いつまでふるのかと思ひながらも、みんな落ちつかなかつた。

そして、父は雨カップをき、そこらのあるきまわり、私達はひなんする用意。

やがてバスが、来てくれた。

運転手の人が、中学校まで乗せていってやるといったが、いとこの人達が、来てくれるとってことわつた。

いくらまっても来なかつた。

そんな中で、近所の人に、母と妹二人が乗せていってもらつた。

あとにのこつたのは私と、すぐ下の妹と二人だけだった。

そしてとなりの家の人とでいた。

そのなかの三人ぐらひはそこらの見回りと言うか歩きまわっていた。

やがて車がきた。

でも乗っていた人は、中学校にいてもあぶないというので私達はその人の家にいた。

少し時間がたった。

私達はその人の家で、お母さん達は、大じょうぶかなと思った。

「ドーン」とものすごい音、なんの音だろう。

お父さんが、「ぬけた。」といった時には心臓がとまったように、もう終わりだと思った。

それで、もう中学校へひなんしようと、私達は出発した。

キチガイのようになって私達は、ぶるぶるふるえがとまらなかった。

中学校にきてみるとたくさんの人がいた。

私達はA組の教室に行った。お母さん達も元気にしていた。

みんな災害のことばかり話していた。一Aの康江さんがいたので話しながら、タンカで運ばれていく人、けがをしてねている人など見て、だれがこんなにしたのだろうと思っていた、そしてお父さんのことが心配になってきた。

まだ近所の人と中奥にいる。お母さんに言うと、お母さんは青い顔をして、心配せんでもエーとしかった。

教室でじーっとうずくまっていると「ゴロ、ゴロ、ゴロー、ドン」と音がする。

こんなことになるなんて……と私は気分が悪くなりはきそうだった。

よく朝やっと家に帰ったが、すごい災害、まさに集中攻撃にことばもなかった。いくか所もくずれ、くずれかかっている、何とみにくいすがた……。

なくなった人の遺体が次々と発見されていく。

なんにもしないのに、なんの罪もない人を殺して行って、あのみにくい十日の夜。そして新聞をみて、私はメイ子さんの死をしまった。

はじめは何かのまちがいで、でたらめにきまっていると思ったがほんとうのことだったのだ。

私達クラスのまとめ役、元気な笑顔。九月十日の日が本当の別れだったなんて。

うそ、うそだと思っても、思っても、メイ子さん帰ってきてと思っても、もう二度と帰ってこない……。

そうしきの日、メイ子さんの写真を見るのがこわかった。

二度と帰ってこない人だと思うと……。

メイ子さん、安らかに眠って……。

もう一步であぶなく

二B 庄 司 利江子

九月十日、雨が強くふきつけている。

午前中で学校を終わった私は、川の水を心配しながら家にいた。こんな雨の強い日にお母さんとお姉さんは尾鷲に行っている。

マスノおばちゃんと、マキ、ワカ、カヨ、妹に私、みんなが川の水を心配していた。

お父さんも三時ごろ仕事をきりあげて帰ってきた。

近所のおじちゃんたちも川の水をせきとめるのに、強い雨の中カップをきてがんばっていた。

マスノおばちゃんは自分の家を心配して見に行った。お父さんは雨が少しずまだったので、仕事道具をしまいに行った。

大人の人がだれもいなくなったら雨が又強くなってきた。私も心配だったので川の水をみたら、道にみんなあばごしをしていた。裏の畑も水でいっぱいだった。

私も、ベニヤ板を二枚うらの畑のところにさして水をせきとめていたら、お母さんから電話で「車が不通で帰れない、川の水はどう」と言ってきた。

私は「今お父さんが仕事場に行ったあと川の水が道にあばごしてきてんわい、そやけど心配すんない」と言って電話をきった。

少ししてからマスノおばちゃんが「水がえらいさか子供らつれていくわよ、おまえら行こう」と言っては行って来たが私たちは「よいわな」と行かなかった。マスノおばさんは帰っていった。

少ししてお父さんが来、他の人と一緒に道に水のこないようにしていた。またいちだんと雨が強くなっていた。

おとうさんは、げんのうをとりだし、コンクリートをやぶりはじめ、二ふりしたらどうしたとか、げんのうがおれてつかえなくなった。しかたがないのでおとうさんは「水がおすかもわからんから店のものを上にあげとけよ」と言って家に来た。四時十五分ごろだった。

その時、実もおじちゃんと、きくひろおじちゃんの鋭い叫び声がきこえた。

「山がぬけたーッ。」

というさげび声である。

私はそれを聞いて、二階ににげかけていた。そしたらお父さんが、知をおぶって「外へ出よっ」とさけんだので、はだしてとびだした。そして助かったのだ。

あの時、家の横にいたおじちゃんがさけばなかったら私たちはどうなっていたでしょう。お父さんの持っていたげんのうが折れなかったら、お父さんは、私は、

妹は、どうなっていたでしょう。

家が三尺もゆがんで前に出してしまうほどやられたのだからきっと大変なことになっていたでしょう。

げんのうが折れなければお父さんは死んでしまっていたかも知れません。私はげんのうが折れたことをとっても幸運に思っています。

たった三十秒、一分が私達の生命を救ってくれたのです。

県道に逃げて、山を見上げたとき、さえおばちゃん所が、土砂に吞まれるのを見ました。

そして県道に一人でいた加保ちゃんと、二人で手をつないでじげに逃げました。

あの時のことを思うと夜もねられないのです。

今でも、さえおばちゃんの家が土砂に呑みこまれる所がはっきり目に浮かびます。

あの時のこわさは、私たちでなければ、誰にもわからないと思います。

でもあの土砂で十三人も死んだとは信じたくありません。

今でも、メイ子や、マチが歩いてくるように思います。

不幸をおよぼした夜

二B 榎本英人

九月十日午後四時過ぎ、ぼくと、ばあちゃんと、隣の家を上げて行った。

畳を上げ終わり、ぼくは「ばあちゃん、あっちの家に行くわい。」

と、言ったら、おばあちゃんは「便所に行ってくるわ」と言ってわかれた。

家の中に入り、ふろをくべにいった。そうすると、「ゴー」と言う、うなり声のような音が聞こえた。

それで急いで、庭に出ようとしたが、戸があからなかった。なんべんしてもあかないと思っているうちに、家の中にどろどろのまじったどろ水が流れてき、アッというまに

「バリバリ」

と柱がおれ、死ぬかと思った。戸がやぶれて、どろ水といっしょにおしだされるようにして外に出た。上を見たら、おかあさんがいた。

ぼくは、死にものぐるいで、「たすけてくれ、たすけてくれ。」とさげんだ。

そうして手をのばすと手をつかんでひっぱりだしてくれた。

おかあさんは泣きながら、「おとうさんとおばあちゃんがおらんねわよ」と言った。

ぼくは、なみだかでてきた。しかしすぐ「おとうさん、おとうさん。」と呼びまく

った。

しかし、返答はなくなおもよびつづけた。そしたら、おじさんの人がきた。とんでこいと言うので、二m半～三mぐらいある高さのへいからとんだ。道に落ちたとき土の中にはまりこんでしまった。ちがうおじさんが、元、谷だったところを体をもって来て、ほかのおじさんが、傘をだして来て、わたしてくれ、「まっすぐ道をいけ」と言ってくれた、そのとき後ろを見たら、おかあさんは他の人にたすけられていた。それを見てから僕は走った。

宮さんの近くに来ると、おばさんの人が走ってきてくれ、家につれてってくれた。その人の子の服をかしてくれて「そこに寝よな。」と言ってくれたのでねた。

そしたら何枚もふとんをきせてくれて薬をつくってくれた。

そのひとも中学校ににげる用意をしていた。にぎりめしをつくっていてぼくにもくれた。しかし、一つしかたべなかった。

すこしたって、中学校へいくのでそのおばさんがぼくをおんでくれた。中学校について、すぐ看護婦さんの所へつれてってもらい治りょうをした。看護婦さんが、「足のきずに物がはいっていたらわるいから、病院へいってもらいます。」と言った。

それから数時間たって病院の先生がきて、「もがみで、いってもらいます。」と言ってきた。奥のおじちゃんが「どないすんのどよ。」と言うので、「いこかいな。」と僕は答えた。

中学校を四時ごろでたが、もがみが来るがおそかったので六時ごろ乗った。

船にのってすぐよった。

マイクから「尾鷲に直行、一時間半ぐらいでつく」と放送されたあと、半時間で尾鷲につくと思って目をつぶっていたら、ねてしまってすぐついた。

尾鷲湾について、おりようとしたら、カメラのフラッシュがまぶしかった。

車が来て、それに乗って病院について、すぐレントゲン室にはいり、とった。

四、五日たち退院したが、入院しているあいだにも、おとうさんがまだ見つからないということが、つらかった。

退院して、家もなくなった賀田にかえり、二日ぐらいたって、泥の中からおとうさんが見つかった。

何も言えなかった。

あんなおそろしい山津波は、もう二度とおこらないようにしてもらいたいと思う。だが自然には勝てないともおもう。

しかし、このつらいことはいつまでもおぼえておきたい。

大川利治さん（亡き大川メイ子さんの父）の手記

千ミリを越す記録的な豪雨が、尾鷲、熊野地方を襲い、古江新開地は一瞬の間に山津波のため押し潰される。

時、昭和四十六年九月十日午後四時五分頃なり。

死者十三名、重傷一名、軽傷二名、奇跡的に無傷に近く脱出した物六名、全壊家屋七戸、半壊損害家屋七戸、惨として直視すること不能なり。

踵を接して賀田町にも大被害が発生のため、交通通信は寸断され水道、電燈、亦全機能を断つも古江の場合、幸いに無線保有の道路パトロールカーが、小学校附近に居たために尾鷲警察に連絡がつき全町民全力をあげての救出作業に当たるが目を奪う土砂と岩石を加えて何時止むともしれる大雨のため三人を救出、三遺体を収容したにとどめ暗くなったため中断し、翌十一日より、県警機動隊久居自衛隊第十師団三十三普通科連隊（前田中也連隊長）隣接地区三木浦町等の応援を得て探索に当たり十三遺体の収容を終わりしは、九月十日なり。

尊い犠牲者は次の通り。

大川いさえ（五十三） 長女ふみ（二十三）

大川強子（四十七） 大川とよみ（四十二）

長男岳洋（十五） 大川さえ（三十七） 長男昭彦（九）

救出後死亡 二女まちほ（二） 庄司雅文（三十一）

大川明子（三十二） 大川メイ子（十三）

大川淳木（三） 大川りさ（一）

九月十七日午後一時三十分より、祈りからの雨の中を参列者むせび泣く袖に漁業組合長大川顕氏葬儀委員長となり漁協東側にて合同葬を行う。関係各方面より多数の御参りを戴く。

泉下之霊よ以て冥せよ。

古老の伝えるところでは、八十年か百年前にも、一度山抜がありしことは、確実なれども当時は、人家がなく畑ばかりのため確たる記録がなく、賀田町もぬけ谷の異名有る由にて之が惨害をもたらしたと、大雨になれし我々には今後、心にすべきこと多々あることを銘記すべし。

以上は、大川岳洋の叔父の大川忠佳さんの後世にのこすための記録なり。

メイ子の父として救出作業に従事していただいた中学校生徒一同と職員一同の寝食を忘れた御奉仕に厚く御礼申し上げます。又合同葬には、職員一同中学校生徒一同のご参列をいただいて父として感泣しました。岳洋やメイ子もさぞ君達の御厚意に喜んだことと思います。

かさねて厚く御礼申し上げます。

二度とこのような事が起こらないためにも新開地の場合を考えてみると十三

名の尊い犠牲を出したが、その人達は各家庭に居て階下にいたためか、大人は外で作業中のため難にあわれたのです。

後になって考えてみると、親の欲目か、二階にでもいれば全員助かったのではないかと思います。

皆様も後生も記録にのこすには、二階に居れば山津波の場合百パーセント助かると記録に残すか言い伝えてください。其の場合でも大雨の時には谷附近の家は、早い目に安全な場所に避難するのが一番です。

メイ子の場合も二階で山津波の音を聞き、階下に下りて逃げようとして難にあったように推測されるのです。

二度とこのような事があってはならないが、昭和四十六年九月十日の集中豪雨による、山津波をよい教訓に、日本一雨の多い尾鷲地方ですから二度とこのような事が、ないような行政をしてほしいと祈って筆をおきます。

昭和四十六年十二月一日

大川利治

友よさらば

三B 荒木美治

岳洋何故死んでしまった
皆おまえが死んだので
悲しんでいる
おまえもつらかっただろうな
妹をかばって……
それだけでもおれ達を泣かせる
おまえは皆から好かれていたのに
運動会ももうすぐだったのに
あのいまいましい集中豪雨のために
岳洋おまえはもうこの世にいない
しかしお前の顔が声が勇気が
みんなの心の中に
生きているだろう
そしてみんなのあの
九月十日の日のごとは
一生忘れないだろう

友よ安らかにねむって……………

☆☆☆☆~~~~~☆☆☆☆

あとに残るのは悲しみだけ

三C 大川 綾代

あの日、九月十日は、朝から雨が止むことをしらぬように降り続いていた。その日も元気に笑いながら、学校に来ていた岳洋さん。そんな岳洋さん。事故は、四時過ぎだったと聞いている。その話が私の耳に入ったのは五時ごろだったと思う。母が来て「新開地が全滅やよ。」と、泣きそうな声で言った。次のことばは「家は影も形もないのに。」そうしたら「豊美さんらも義之さんとこへ逃げとってんて。」と、言った。

その瞬間、私は前がまっくらになった。心の中では、「岳洋さん助かっていて」と祈り続けていた。それからどれくらいたったろうか。

「岳洋はあかん。」と聞いた。でもとても信じられなかった。いや、信じたくなかった。組合へ避難したら奈美保は助かったと聞いた。

翌日、岳洋さんの所へ行った。水をむけさしてもらった。

口びるはまっさおで、あごの所に紫色をしたあざのようなものがあつた。岳洋さんが横たわっているのを見ると、なぜか涙が止らなかつた。もう二度とあうことができないのだなあと思うと遠い旅に行かせるのは、たまらなくいやだった。

自分の目で岳洋さんを見た。これから一生自分の前に姿を現さないのかと思うといてもたってもいられなかつた。それから、友達と現場を見に行つた。

「いやー」 思わず声が出てしまった。

「ようもこんな所から美奈保が助かつたもんやなあ。」と思つた。そこは、母の言つたとおりの家の形もなく残酷そのものであつた。

私たちは、よくけんかをした。いわばけんか友達だったのである。その相手がいないと調子が狂うし、さみしい。

友達を亡くす事は、こんなにも悲しいものなのか。このような事故で死ぬのはなさけない。岳洋さんは、よほど運がなかつたのだろうか。

自然の力は恐ろしいものだ。人間にはどうすることもできない。今はただ、二度とこのようなことがないように祈るばかりだ。

今までも各地でこのように自然による事故があつた。友達を亡くして泣いている人や、いろいろな人々を見てきた。でもどれだけそのような場面を見ても、人事だと思ひ、気にかけた事はなかつた。

それが、今、私にふりかかつてきたのだ。どうする事もできなかつた。

ただ泣くだけだ。

岳洋さんは、どんな事を思いながら、永久の旅に出たのだろう。きっと「勉強したい、勉強したい。」と思ってたにちがいない私だって、もっといっしょにたのしく勉強し、生活したかったもの。高校へも行きたかったろう。いや高校へ行く為に勉強してきたのだから……。

現場で見つかった黒い布のかばん。その中には暁5コースの物が入っていた、テストも近いのでやっていたのだろう。とてもがんばっていたようであった。

八年間、勉強してきた事は、一瞬にして消えてしまった。

私たちは、岳洋さんの分まで勉強しなくてはならないのだ。

きっとみんなを岳洋さんは、見守ってくれると思う。きっと、今までの事、思い出すたびに悲しくなるけど、岳洋さんのこと、一生忘れない。

信じられない

一B 村 上 尚 美

だいたい四時三十分ごろカミナリのような音がした。

私はてっきりカミナリだと思っていた。

そのよく朝起きてみたら、家にはだれもいなかった。

私はみんながいないので心配して家の中をうろちょろしていたら、お母さんが家の中に入ってきて

「その橋がつぶされとるし、何人か生うめになつてんで。」

と、言ったとき私はドキッとした。

しばらくして外から帰ってきた弟が、

「古江の中学一年の人が二人死んで一人は足をけがしてんで」

と、言っても私は信じられなかった。

でも、まさみちゃんの所へ聞きにいったらメイ子さんが死んだという。

私はまだ信じられず、今からでも古江に行きたかった。

でも、いく道があぶないというので明日にした。

あくる日、私たち四人は古江に向かった。

私は信じられない。

ひろよさんや、かなちゃんは、くる道も泣いていた。

メイ子さんの家についた時、かんおけが2つならんでいた。

あの中にメイ子さんがいると思うと、かなしくってたまらなかった。

「上へ上がってくれ。」と、いったので上へあがっていったが、かんおけの方をよく見なかった。

さっきまで話していた人たちも、私たちが泣き出すとみんなシーンとしてしまった。

それから私たちは、家に帰り昼食を食べて、メイ子さんを見おくりに行くのにあつまった。

メイ子さんが焼き場へ行くのは四時半ごろだという、三時三十分ごろ賀田を出、古江にむかった。

古江に行ってメイ子さんをまっていた。

しばらくたって岳洋君のおかんがおりてきた、三年生の方は泣いた。

そのすぐあと、メイ子さんがおりてきた。

メイ子さんのおかんがおりてきた時、みんなは声をあげて泣いた、ゆりかちゃんもぼう然として立っていた。

加奈ちゃんたちも「なにもメイ子さんに罪はないのに。」

と、泣きながらいっていた。

れいきゅうしゃが出発した。

まさみちゃんはその後をおったが車は速くてまさみちゃんの足ではおいつけない。

賀田の方は、かえりながらも泣いていた。

私は家に帰っても思っていた。

(メイ子さんが、車にゆられて生きてこないかと、そして学校へこないな。)

何日かたち、そう式の日がきた。

そうしきをしていても、加奈ちゃんは、

「メイ子さんは、入院しとんねり、あしたかえってくんねり。」という。

「明日きたら、バレーボールすんねり。」と、いう。

佳子さんと二人で泣いていた。

まだ私は、信じられない。

岳洋よ安らかに

三C 大川 信 明

「たすけたってくれ。」そういって僕の家にとびこんで来たのは僕のおじにあたる人の妻、節子さんだった。

その日は九月十日、ちょうど午後四時ごろだった。

僕の家ではもうだいぶ前から停電になっているので、ろうそくの明かりで夕食を食べている時だった。

あわてふためくその人は、気ちがいのごとく泣きわめいていた。

何を言っているのかははっきりわからなかったが、どうやら家がつぶされ、子供二人が生埋めになっているということらしい。

その時、僕の脳裏には「岳洋はだいじょうぶかいな。」そういうものがふっと出てきた。しかし人間は心配というものをきらうもので、僕にも「だいじょうぶや、岳洋のことやさかいにどこそへ逃げとるやろ。」と安心感にたものがあった。

父が帰ってくると「新開地、全滅や。」そういった。ぼくは一瞬ドキッとして「岳洋は？」と反射的に聞き返した。父は「岳洋はどこぞへ逃げとるやろ。」と暗い表情で言った。僕にはそんな父の表情がどうしても納得できず、続いてはいつてきた母にも聞いた。母も父と同じように答えた。

それからどれくらいの時間が過ぎ去っただろうか。母は突然「岳洋は生きとらへん。」僕は冗談だと思い「うそいな。」「うそやない、ほんとうや。」しかしいくら母のことばでも信じるができなかった。

八時頃、岳洋がいるという家へあの憎き雨の中を母と二人で行った。家はろうそくの明かりでうす暗く、時々吹いてくる風にゆらゆら動いていた。

岳洋は奥の間に寝ていた。白い布を顔にのせ、寝巻きを着ていた。今にも起きてきそうな気配だった。

水をつけてやるのに布をとると岳洋は静かに寝ていた。僕の家泊まった時のあの寝顔で……。とめどなく涙があふれだし彼の思い出が頭の中をゆらゆら動いていた。

その日も二人で並んで雨の中を登校した二人だったのに……。

話をしながら。冗談を言いながら……。誰を憎んだらよいのか。岳洋がどんな悪いことをしたのか。なぜ悪い事をしていないのに死ななければならないのか。

僕の胸ははりさけんばかりだった。むごいといえばあまりにむごい。これから大きく羽ばたこうとする若鷲を……。

やがて岳洋に別れを告げ家に帰った。

帰ってからも何をしたらよいのか？原因をつきとめるというが、たとえ原因がわかったとしても岳洋は遠い世界から二度と帰ってこない。しかし岳洋は二度と笑わないが、僕の心の中に入りっぱに生きている。岳洋はいつでも僕の相談にのってくれる。

岳洋は僕とっしょに残りの人生を歩む。

僕とっしょに……。

岳洋よ 安らかに。

さよなら岳洋君

三B 三 鬼 千 恵

九月十日ーこんなことがあってもいいものだろうか？

突然の、あまりに突然のことであった。

午後まであんなに元気だったのに……。岳洋君なぜあなたは死んでしまったの？あなたが何をしたと言うの？

その日は朝からはげしい雨が降り、古江の男子と曾根の男子は歩いて通学しなければならなかった。

そのふりしきる雨の中を元気に歩いてきた貴方が、その日のうちに死んでしまうなんて……。午後の授業が、カットになって喜んで帰った私達……。だれが、こんなことになるなんて想像しただろうか。

九月十一日、私はめずらしく早く目がさめました。母から、古江の事故のことを知らされましたが、どうせ、ひまな大人の言う事だから、大げさになっているだろうと思い、あまり心配しませんでした。

それどころか、セーラー服を着て学校へ行く用意をしていたのですから……。

船で古江に行って初めて事の重大さを知り、そして岳洋くん“貴方の死”を知りました。

八月十三日、十五歳の誕生日をむかえたばかりなのに、あまりにも短すぎる！まだやりたいこと、やらなければならないことがたくさんあったでしょう。

私は貴方の死がまだ信じられない。いえ信じたくない。でも、私達が再び学校に行った時、貴方の姿はない。

貴方の死体を見たとき、とても怖いと思った。なぜ？だろう……。

母が二枚の貴方の写真を見比べて、最近の写真はなぜかさびしそうだと言います。笑っている貴方の顔がさびしそうだと……。

貴方は三年生全部を友達とし、話しやすくて面白い人と人気があった。

でも本人の貴方は、根性があつて勤勉家だった。その証拠に貴方は奈美子ちゃんをかばって死んだ。

天国の岳洋くん美奈ちゃんは無事です。みんな貴方のおかげです。

私たちは、貴方の勇気ある行動をたたえ、いつまでも貴方のことを、この残酷なできごとを忘れません。

二度と再び、こんなことをくり返してはならない！！

岳洋くんさようなら……。天国でお母さんと一緒に、貴方のおとうさんと美奈保ちゃんと、私達を見守って下さい。

今度こそ本当にさようなら。

帰らぬ友

三B 小川公明

あの日の雨は、一歩さきも見えないくらい、真白になって降っていた。
学校は昼までで終わり、岳洋にローカであった時、「いくわよ」と言って岳洋の頭を、ポンとなぐって帰った。
次の朝、僕は橋の所まで行ったら、皆が岳洋が死んだと言っていた。
その時、皆がうそをついているのかなぁ？とおもったが、船で賀田へ来たら、賀田の子らも、岳洋が死んだと言っている。
その日、僕らは古江に行き、岳洋にあった。
岳洋は白い布をかぶって、いきもしないでねむっていた。
岳洋が梶賀へ、ボートに乗ってきて、いっしょに乗ったこともあった。
けんかをしそうになったときもあった。
だけど、今はもうけんかもできない。

神様はどこにいるのでしょうか。

三C 三鬼ほず

九月十日、いつもなら注意報は出ても、勉強は中止にはならなかった。
だが、この日は大雨で風も強く、通行止めになるかもしれないということで、昼から休みになった。
あの時、皆喜んでいて。きっと岳洋君だって喜んでいただろう。
それなのに、あんなことになるなんて…。
あの山津波がおこる午後四時四十八分頃、みんなは何をしていたんだろう。
家でテレビを見ていた人もいただろう。
何かして遊んでいた人もいたかもしれない。
どっちにしても岳洋君やメイ子ちゃんのように、苦しいめにはだれ一人としてあわなかったはずだ。
今は、もういない、あの人達の事を思うと、こうして一日を無事で暮らしていることだけでも、おおげさかもしれないが、幸福なのではないかと思う。
もう少し、一分でも五秒ぐらいでも、時間があれば助かっていたかもしれないのに……。
あの人達は何も悪いことをしたわけでも、ないのに……。
私はもし本当に、この世に神様がいたとすれば、神様って本当は、とても薄情で罪悪で残酷なんだろうと思う。

午後七時前、テレビのニュースを聞いていたら、三重県尾鷲市古江町の小学校前が、がけくずれ。死者が大川たけ…と言ったので、まさかと思ったが、はっきり聞かなかったのもちがいで思っていた。

ニュースをまって、九時にもう一度聞くと、今度は、はっきりと大川岳洋十五才と言った。

信じられなかった。自分で信じるなど言っているみたいだった。

そして、午後五時二十分頃賀田に山津波がおきたときいた。

被害は、古江より賀田の方が多かった。

同じ学校で同じように勉強していたのに……。

そう思うと涙が出てきた。

なんだか重い物に上からおさえられているような気がした。

現場へ着いた時、作業が進んでいた。

ここが古江の新開地なのか、これが賀田なのかと思った。

友達が目をまっかにはらして、物を運んでいて、泣きながら次の時のことを話してくれた。

それでも、まだ信じられないような気がした。

岳洋君、めい子ちゃん、私達は、あなた達の事を一生忘れないでしょう。

おこりっぽくて、話しやすく、気のやさしいところがあった岳洋君。

明るくて、ほがらかで、クラブの時に体育館で、友達とふざけ合っていためい子ちゃん。

そして、山津波の犠牲になった人達。

どうか、安らかに眠ってください。

そして、二度とこんな悲劇な事がおこらないことを祈ります。

自然の力の怖さ

大 川 さおり

「山くずれ！」と、姉が二階から叫んだ。

母が飛んでいったが、もう山崩れの光景は雨の中に消えていたようだ。

九月十日、その日は朝から強い雨が降っていた。

午後四時すぎ、水しぶきが山一面をおおったようだ。でも途中で見えなくなったので、大したことはないだろうと安心してた。

五時すぎ、ラジオを聞いていたら、「尾鷲市古江町で山くずれのため十数人生埋め……」と言った。

近所の人達に聞いても「知らない」というので、ほかの地区のまちがいたらう

と思っていた。

少したった後、近所のおじさんが「新開地全滅やり」といった。

おじさんは、くわしく話してくれた。私は新開地附近の友達のことを心配し、祖母も娘と孫のことを心配して直ぐにも現場へ行きたい様子だった。

そうしているうちに母が隣の家からようすを聞いて教えてくれた。

「今、岳洋と美奈保が見つかったそうやわ、二人とも足をけがしているだけで…」

そこまで聞いて私は安心した。しかし、おばや、いとこや他の人たちはまだ見つからないと言う…。

雨はなかなかやみそうになく、むしろだんだん強くなっているように思える。

家族の者だけでは現場のようすもわからないし、心細いので近所の家へ行くつもりでみんなレインコートに身を包み、雨が小降りになるのを待っていたら「この辺はがけくずれの心配がありますから、早く浜のほうか、漁協へ避難してください。」と警察の人がわざわざ家まで知らせに来てくれた。

母や私達だけならいそいでいけるが、八十五歳の祖母がいるのでなかなか行けない。母が祖母をささえるようにして私達は家を出た。

小さい懐中電灯だけで心細かった私達を、大きなライトでやさしく照らしてくれる人がいたので心強くうれしかった。

おばの家についたのは十時すぎだった。母達が山くずれのことを話しているのをきいたら、「なア、かわいそうに岳洋あかなんだんやってな。」と言った。

私は、一瞬自分の耳を疑い母にきき返したが、まちがいでではなかった。

前、母が家でいったことは私に心配をかけないようにウソをいったのだった。

あまりの驚きに涙も出なかった。

十時半頃、青年団の人が、漁協に避難するように回ってきたので、友達と顔を合わせるのがつらくて行きたくなかったが、祖母と、おじとおばを残して私達は、着の身着のまま漁協に避難した。

漁協で友達が「岳洋さん死んだんやってな。」と言ったが、まだ信じられず、何ていっていいかわからなかった。

後ろのほうを見ると同級生が集って泣いていた。

友達が私のそばに来て、「岳洋さんが……」と言って、ワーと泣いた。

私もこらえきれず、友達と抱きあって泣いた。いくら泣いても、いくら話しても生きかえれないが、その日の昼までのことを泣きながら語りあった。

その夜は机にもたれて少し寝た。

朝、目を覚ますと、昨日のことがうそのように好い天気だった。

何かいい現せないくやしさがあった。

私は黙って空を見つめていた。

天災への怒りと悲しみ

三C 大川玉穂

昭和四十六年九月十日、忘れようとしても忘れられぬ日になってしまった。

あの日は、朝から降り続いた雨で、学校は昼までで終了した。

家へ帰ってきてから、ごはんを食べ妹と一緒にテレビを見ていた。

四時ごろ、急に、ドドドーという音がした。私は、雨が急に強くなったのかなあと思い、大して気にとめなかった。

その時、近所のおじさんが、「山津波やあー。」と、言いながら、わたしの家へ、四人の子供をおいて、母に言った。

「新開地の方や、おれはこれから見てくるさか、子供らを見といてくれよ。」その言葉を聞いたとたん、母は、力が抜けたように、「義のおじいちゃん所だいじょうぶややろか。」と言った。

私は母に、「だいじょうぶやわな。」と言ったが、内心ではだいじょうぶかいな、という気持ちが強かった。

それから、時がたった。近所のおじさんは、息を切らしながら、「新開地ら、全滅やわ、いそみたいになっていっとなねりよ。」

母はそれを聞いて、美鈴おばちゃん所へ、知らせに行った。

後に残された、私と妹は、どうしたらよいのか、なにがなんだかわからなくなってしまった。気がついたら私達は、母の着がえを持って医者やへ来ていた。

そこには、さえおばちゃんが、毛布にすっぽり包まれて横たわっていた。

昭彦は、苦しうに顔をゆがめ、和美おばちゃんは、どっかのおばちゃんと、話をしていた。

美鈴おばちゃんは、泣きながら、毛布にすっぽり包まれているさえおばちゃんの足をさすりながら、昭彦の体を見守っていた。

美鈴おばちゃんは、私達に、「とみど屋へ行ってこい。もう、まちほら死んでいたわ。」私は、そのことばを疑わずにはいられなかった。

とみど屋へ行くと、四、五人のおばちゃん達は、泣いていた。

その中に、毛布に包まれた、まちほを見た時に、私は泣いてしまった。

まるで、眠っているようだった。

かわいそうに、こんな幼い子供の命まで、うばいとってしまうなんて、あまりにも、ひどすぎる。

家へ帰って、よし屋へ避難した。おばちゃんにふとんをひいてもらって、床についたが、母は、気が狂ったように、泣いていた。

私達は、昭彦が、元気になるように、祈りもむなしく昭彦は、この世を去ってしまった。

あくる朝、私達はとみど屋へ行った。

そこには、さえおばちゃん、昭彦、まちほが眠っていた。

いまにも声をかけたら、すぐ起き上がってくるようだった。

みんなが泣いていた。私もただ泣いた。現実とは思えない、いたたましい天災の怒りと、悲しみだけが、私の胸を熱くした。

ついこの間、母といっしょに、家へおとずれた時は、笑顔で私達を迎えてくれたさえおばちゃん！

やせていて、少しおっちょこちよいだった昭彦！

かわいくて、すこしおてんばだったまちほ！

こんな暖かい家庭を無残な姿にさせた天災がにくい！

雨がにくい！

同級生の岳洋さんが死んだと聞かされたのは、十日の午後七時ごろだった。私は、自分の耳を疑った。うそであってほしいと思った。

しかし、それは現実であった。あんなに体格のよい、いつも笑顔を忘れなかったやさしい人が、もう帰らぬ人となってしまったなんて！

天災さえ、起こらなかつたら、こんなことには！

十三人の火が、燃えつくしてしまった今は、めいふくを祈ることくらいしかわたしにはできない。

さえおばちゃん、昭彦、まちほ、岳洋さん、メイ子ちゃん、その他八名の皆さん、どうか天国でお幸せに。

古江町被害者住宅での聞書

大川せつ子さんの話(二十八才)

あの日子供を下に寝かせて余り雨が強いので、私は二階から水を見ようと思って二階へ上がって行きました。

丁度ろうかまで来た時、突然バリバリッというものすごい音が聞こえ、あっという間に家ごと流されました。

三十メートルぐらい流され、下の別の家に重なってとまりました。

わたしは二階の窓から、その重なった家づたいに外へ逃れ夢中で助けを求めました。

家の一階は土砂で全く埋まり、二人の小さい子供はその中で亡くなりました。

わたし自身こうして生きていられるのがふしぎでなりません。

あの日は川の音が大きく、何度も二階に水を見に行っていたのですが、そのちょっとした間子供達から離れていた時あの山津波が……………。

古江町被災者住宅での聞き書き

庄司典代さんの話（二十九才）

家は全壊です。側溝の水があふれてくるので主人はそれを見に外へ出ていました。その時山津波がきたのです。ゴーッという音と同時に土砂が来て埋められました。ふと気がついて上をみると少し明るい所があったので夢中で子供をつれてそこからはい上がりました。

そして泥まみれのまま国道まで出たとき誰かが助けてくれました。

でも主人は外へ出ていたためだめになりました。

わたしはこの土地へ来て日が浅いのでよくわかりませんが、とにかくあの日はゴロゴロと石の流される大きな音が聞こえてとても不気味でした。

今、子供と二人で暮らしています。

災害の後は大勢の人達に色々としていただきとても感謝しています。

大川ひさ子さんの話

家は側だけが残っています。

あの日、四時すぎだったのでしょうか。子供を抱いて家にいたら変な音が聞こえました。

主人が外を見たら、東の家が浮いているというのです。それであわてて外に出たとき、泥水が押し寄せてきました。

私は子供だけをひっかかえて必死で逃げました。

上から下まで泥にまみれ、逃げまどいました。

まだ明るかったので、何とか逃げることができました。

でも、何処に逃げても安全な場所はないのですから、何度も覚悟を決めました。

この住宅はトタン張りなので、少し降っただけでも強い雨に聞こえ、今でも雨が降ると恐ろしいです。

忘れられざる悪夢の雨

三A 中村公郎

“日本の南岸沿いには秋雨前線が停滞しており三重県南部地方には、大雨注意報がでています。”

その日は低気圧が前線を刺激し尾鷲、熊野地方に大雨をもたらした。それで四十二名の犠牲者が出た。

輪内地区ではなんと二十六名もの人が一命を閉じた。輪内中学校の生徒も二名が犠牲者になってしまった。

九月十日、金曜日、前日から降り続けている雨が地面に激突していた。学校も授業を午前中まででカットして各家庭へ避難させた。

俺は梶賀にある家へ帰ったが、雨はやむ気配もない。バスとそれに続いて紀勢線も不通になった。

三 PM 頃賀田から帰ってきた父がいうことには、賀田は浸水しているようだ。

でもその事からは、あの無残な被害は想像さえもできなかった。

天には黒雲、雨は降り続いた。五、三〇PM 頃電気がストップした。

暗闇の中、三十分後には電話もとだえて“めくら”になってしまった。

そのころはもう古江、賀田では悲劇が起きていたのだった。

その日は早く床についた。でもなかなか眠れなかった。あれは一〇、三〇PM 頃だったろうか。

雨が強いので、すだれをおろすためと、それに外で光がするので雷ではないだろうかと思って屋根に出て、すだれをおろしていると山のむこうで、ゴロゴロという音がした。

でもそれは雷の音ではなかった。岩と岩がぶつかり合うような音だった。そら耳だったかもしれないが不吉な予感がした。

新聞にも、パトロール中の警官が一〇、三〇PM に山津波の音を聞いたと書いていた。

僕は、あの悲劇も知らずに、ただ何事もなく明るい朝を迎えられることを願いつつ、いつか眠ってしまった。

翌日、外は小雨がぼろついていた。何も変わらないような土曜だったが、バスが不通で学校へ行けないことを知った。

それでも七 AM 頃、食事に行った。すると電気がきていない。昨日の雨が思い出された。

僕はトランジスターラジオを聞いた。七時のニュース、古江、賀田の被害のことを報道していた。それには岳洋君の死も電波となり、報道された。

僕は被害の大きさに驚いた。

船で賀田へ行って中学校へ向かった。途中現場があった。
荒れ狂った後の様で、全体が暗い感じだった。真新しい赤土、そして流れる水。
学校も荒れていた。一階が浸水したようだった。ベッドは二階にあったがなにか強い臭いがした。
それにベッドの血、昨日治療したなど想像がついた。
その日、の賀田の人たちの目は、盗賊に襲われあてのない人の目のようにどんよりとしていた。
この日のことは事故ではあったが、前にもくずれた事のある所がくずれたという。
いつもは大丈夫だと思っていたが、考えてみれば、どこもが危険なような気がする。狭い土地の宿命なのだろうか。
僕達は、この雨でたくさんの命を失った。故岳洋君も宿命の波に流されてしまったのだ。
この悲劇を脳裏にきざみ、今、宿命との対決をしなければいけない。
犠牲者の人のためにも、二度とこのような災害を起こさないように。
昭和四十六年、九月十日。
あの恐怖の一日は、忘れられないだろうし、忘れてはいけない。

恐 怖 の 思 い 出 と 記 録

九月十日のわたしの記録

二 A 高 野 淳 子

雨がひどいので、学校は昼までで終わった。
家へ帰って、お母さんと妹といたら、近所の人が、
「あぶないから、逃げたほうが、いいんじゃない。」
と、言って来たもんで、上のおおやさんの家へにげて行った。
そしたら、おおやさんの家の横から石がくずれてきたので、こわくなって知り合いの家に行こうとした時、考ちゃんとおばちゃんが、ここにいたらいいと言ってくれたので、考ちゃんの家に行った。たくさんの人がいたので心強かった。
考ちゃんとおばちゃんこのよこの川を見ていたら、川の水が、道路へ出てゆき、道まで川になっていた、川の中の石ころのなる音が、かみなりのような音でゴロゴロとこころがった。
初め茶色だった川の水が、真っ黒になっている。

その時、おじさんの人が何かさげんだ。

雨の音で聞こえなかったが、「にげろ。」といているようだった。

その時お母さんは何かを買を下へ行っていたので、お母さんが大丈夫だろうか
とそれだけが心配であった。

目の前でアッという間に木が流れてきて、みんなだめになってしまった。いや、
その時、そんな事は、考える間もなかった。ただはだしで、かさもささずに、逃
げるだけだった。心臓は「ドキドキ」鳴り、涙がこぼれてきて、どうしたらいい
かわからなかった。

はだしで、かいだんをかけのぼり、司君の家へ行ったが足はガタガタ心臓はド
キドキだった。そして、おかあさんどうしようと、ただそれだけだった。

「お母さん泳げないんだ、犬かきくらいしかできないんだ。どうしよう、死ん
じゃったら私どうしよう。」と、そんなことばかり思った。

「まさか。」と思ったが、でもやっぱりと涙をとめようと思っても、とまらなく
ってぼろぼろ出て来た。

そんな時、福山のおばちゃんが迎えにきてついていった。

妹をだいてまた、はだしで歩きつづけた。

おばちゃんが、「峰ちゃんは」といったので、「お母さん、下へおりて行ったん。」
と答えた。

するとおばちゃんも、「いや、つらいよ。また、どうして下へ行ったやろか。」
と 言った。

おばちゃんの家に行って何分かしてから、お母さんがびっしょりになって来た。

うれしかった。ただそれだけだった。

小さな妹さえ、悪い事が、おこったという事を知っているのか、真剣な顔をし
てだまってずっと私とおった。

いつもならやからばっかり言う妹なのに、考ちゃんところで昼寝しているのを
おこしてきたのと思った。

次の日、お父さんが帰ってきた。その日から、みんなに手伝ってもらってかた
づけた。おおかたの物が、だめになってしまっ、始めからやりなおした。

でも死んだ人の事を考えると、私達はまだまだ幸せだ。

どろだらけのおにぎり

一A 久保康江

九月十日、おかあさんが、ちょうどおにぎりをにぎっていた時だった。

きゅうに、ゴーツという、ものすごい音がしたので、おかあさんが、おにいさんに「見てみよ。」と言って、おにいさんが見えました。

そしたら、「おかあさん、家が、まくれるよう。」といった。

だから、にぎりかけたまま、犬をだいてとびだした。そして、照明君の家の横を通って、道路の方へでた。

そして、犬をおろして「古江のえり子ねえちゃんの所が心配だ。」と、言ったから、古江へ行こうと思ったけど、橋がきれそうなので、堤防をわたればいけると言ったので、行こうかと思った。

だけど、やめたほうがいいと、警察の人が言ったのでやめた。それから、駅に逃げようか、それとも学校へにげようかとまよっていた。

そしたら、中学校にみんなひなんしているといったので、中学校へひなんした。

きのみきのままで、とびだしたので、中学校にいったらすこし寒かったけど、おにいさんがコートをとりに帰ってくれたので、寒くなくなった。それから、犬をだいていたのであたたかかった。朝まで中学校にいた。

朝五時ごろ、帰ってみたら、どろがいっぱいあった。

せんたく機も、ひっくりかえていた。

にぎりかけていたおにぎりも、どろだらけだった。

にわとりも死んでいた。

こんなことが、ほんとうにあっているのだろうか。

わたしは、生まれて、初めて、こんなことにあった。

逃げる場所なんてないのに

二A 大宮啓子

九月十日、きょうは、雨がひどく降るので授業は午前中で終わった。

学校にいる時も川の水がどろのようになってゴオー、ゴオーと流れていた。

家に帰ると、いつも山水で食器などをあらう所から水があふれていたので入口の戸を開けて入った。雨が降ると、いつもこうなのでなれていた。

家にはだれもいなかったが、少ししたら、お母さんが来た。

(姉と、お父さんはよそへいっているので帰ってこれなかった)

それから、知っている家へひなんしたが、その家もあぶなくなったので、また他にひなんした。その家には、たくさんの人がひなんしていた。

まだ雨はふっている。だれだれさんがいないだとか、どこかの家が見つかったとかいろいろ情報が入ってきた。それをきくたび生きたこちがしなかった。

私はその夜、ねむれなかった。ゴオーという音が聞こえるとみんなにげる用意をした。にげる場所なんてないのに……。

雨は、明け方になってやとこぶりになってきた。

朝方になってお母さんが帰れるかどうか見にいったが、まだ水がひかないらしく、帰れなかった。

昼になって帰ったら、町はほそうしている道がどろだらけで家の中までどろでつかっていた、こんなにすごいとは思わなかった。

このぶんだと私たちの家もないと思って帰ったら床下まで水がつかっただけで、ほかは、べつにかわりなかった。

いろいろ家の事をしてから、手伝いに行こうかなと思ったが、いかない方がいいというのでいかなかった。

九月十一日には、自衛隊などがきて、いろいろ手伝ってくれた。

だんだん遺体も出てきた。つかった家もだんだんとかたづいてきたようだ。

私たちは、雨なんかというふうにかんがえていたように思う。この災害でおそろしさをしたように思った。

不安な長い夜

三B 大川 早人

あの日、学校は午前中の授業だけで終わりだったが、雨があまり強くふるので学校で雨をやまし二時ごろ家に帰った。

すると、もう水がゆか下に入りかけていた。

たたみ、家具類などほとんどを母に手伝ってもらって二階に上げたけれど、冷ぞうこなど一人ではもてないものは、前のきつき店にいた親類の人二、三人に手伝ってもらって上げた。

その時には、水はもうゆかに入ってきて、入口が道よりも低いためふさがり出られないので、外から二階のまどにハシゴをかけてもらって外に出て、前のアパートにひなんした。

西の方からは川の水が、はんらんしたとってにげて来る人もいた。

アパートには近所の人たちみんなが集まり、下では、三四人の男の人が水をみはってていてくれた。

電気が消えてローソクだけなので、よけいに不安な気持ちであった。

そんな時、ちょうど三時ごろだが、ものすごい音がした。

それをカミナリだという人や、自動車の音だという人もいたが、地ひびきがおこり、アパートの入口にドロ水がおしよせてき、それで山くずれが起こったとすぐわかった。

みはり番の人がうらに避難するように、指示をしてくれ、外に出ると、その時山くずれで押し流されてきた人が、僕の家の前まで来て、ドロで顔はあまりわからなかったが、「子供を流したったよー」とわけのわからない声で泣きながらはだしで歩いてきた。

その人を一緒につれて東の家にくると山くずれで流されてきた他の五、六人もすぐ後に入ってきた。

泣きながら歩いていた人は、子供を濁水に見失ってはなればなれになっていたので、やがて子供が助け出されたことを知ると入口でだきあってはげしく泣いていた。

そんな人が多く、体のドロを落とし、一だんらくして話を聞いてみると、音が生きて戸を開けた瞬間に流れに押し流されたらしい。

その中でけが人も出て、重傷の人は「もがみ」でつれていってもらった。

恐ろしい、不安な夜はながかった。

九月十日のじごく

一 C 三 鬼 よ み

九月十日の夜、テレビを見ておどろいた。

友達はおじだろか、と思ってねむれなかった。

そして朝早く、かあちゃんがおしえてくれた。

私のともだちが一人土の中にうまって

私の友だちが一人土の中にうまってしまったと…………

かなしかった。「早く見つかってほしい」「死なないで…………」そう思った。

そして古江にいつてきた。

古江の友だちがおしえてくれた。みんなないていた。

げんばにいつて見てみると思ったよりものすごい。こんな中に友達がうめられていると思うとなみだが出た。

とてもかなしかった。

十一日の昼ごろに見つかった。でも…………

かなしかった。おさえようとしてもなみだが出てる。

「だれがこんなことにしたのだろう。」

友達は、うめられるしゅんかん何をおもっただろう。

ひっしにたすけをもとめたにちがない。どんなにくるしかっただろう。いた
かっただろう。

「もう二度とこんなことはおこってほしくない」

ほかのひがいしゃたちも天国でそうさげんでいるかもしれない。

いまでもあのことを……あのありさまを思い出すとたまらなくおそろしい。

もう二度とあんなあやまちをくりかえしたくない。

—— 賀 田 被 災 者 住 宅 で の 聞 書 ——

畑野やそ子さんの話

あの日は、朝から、前の谷の水が増えたり減ったりしていたが、その中で谷水
が茶色にごっているのが異常に感じました。

それでわたし達はあきらめて、寝る用意をしていると、突然ものすごい地響き
が聞こえ、外にいた主人が「逃げろ」と叫んだので、私は子供を横わきにかかえ、
弟が留守だったので身重の弟の嫁をつれ、土砂降りの中を、岡田医院の方へ逃げ
ました。そうですね、恐ろしいなんてものではありません。言葉ではいえません。

逃げた家は、避難してきたひとでいっぱい横になる事もできませんでした。

もちろん上から下までずぶぬれです。

その夜は一晩中山の抜ける音がし、その度主人は見に行こうとしましたが、私
は、もう死ぬ覚悟だから、同じ死ぬなら、家族一緒に死のうと行って行かせませ
んでした。誰もが同じ気持ちだったらしく、親戚どうしがかたまっていました。

雨がやんで月が出たときは、アアいのちがあったと涙がでてしかたがありません
んでした。あの夜の事はとても言葉ではいえません。

*

*

*

*

大川いつ子さんの話

私は母が心配で早くから母の家に行っていました。

そして私がない間に家とともに、主人が山崩れにつぶされ死にました。

家はあとかたもなくつぶされ、下の池にまで流されて主人は死んでいました。

一晩中山の崩れる音を雷の音かな、と思いながら夜を明かしたのです。あの気

持ちはとても言葉では言えません。

二度とくりかえしてはならないと思います。

雨の日には、窓を開けて外を見、谷の水がにごる時は早くから逃げる必要がありますのではないかと思います。山崩れが起こるなんては誰も思いませんでした。

主人は逃げる用意をしていたらしく、ズボンをはいていましたが……。

* * * *

榎本よし子さんの話

私はつぶされた家の下敷きになって三時間いて奇跡的に救い出されました。

山崩れの音で子供を連れ逃げ出そうとした時、家と供に三メートル程度下に流され、逆さまの姿勢のまま下になってしまいました。

顔と水の流れの間に少し隙間があったので、手でしがみついて助けを求め続けました。手をはなすと顔が水溜りに入ってしまったので呼吸ができなくなるので必死にしがみついていた。

一緒に逃げた子供の事が心配で、子供の名を呼び続けました。

腕がしびれ、もう死のう、と何度も手を離しかけましたが、そのつど息が苦しくなり子供の事を思い浮かべて頑張りました。

地獄とはこんなことだと思いました。

子供はその頃、流れているところを救われ私が埋まっているのを消防団の人に言ってくれたので約三時間たって兄の消防団員に救われたのです。

そしてタンカで運ばれ翌朝ヘリコプターでオワセの病院へ運ばれました。

病院で、母と夫の弟が駄目だった事を知らされました。

私の後を通して母が流されていったことを思うと……。

三ヶ月たった今でも体の調子はよくありません。

あんな時は涙も出ないもんですね。

川が道より高くなって

二A 大川英治

九月十日金曜日、朝から雨が降っていた。

ぼくらは、いつものとうり学校へ行ったが、あまり雨が降るので昼まで授業をして帰った。

午後四時すぎ、電気が停電し始めた。外を見ると雨はますますきびしくなっている。前の川が今にも水があふれそうになっているのでぼくは驚いた。

そしてしばらく見ていると、すごい音が聞こえたかと思うと川がはんらんした。

そしてみるみるうちに田や畑が水でかくれ電信柱がたおれ、小学校の裏の便所が、半分かけてきた。ぼくは、また驚いた。

そこへ母がきて早く逃げよといったので、ぼくと母は上の方へ逃げた。みんなも逃げていた。

その晩ぼくはあまりねることができなかった。

あくる朝ぼくは家にもどると、家の前がまるで、いそのように、石がごろごろしていた。その下へ行って見ると田が川になっているところもあった。

昨晚聞いた山くずれのあった方について見ると、家がなくなった所や人がなくなったりしていた。ぼくはたいへんびっくりした。

それから町にしてみると、川が道よりも高くなってしまって水があふれ警察署の所から農業組合の所までの道がまるで川のようにながれていた。

ぼくはその道を通って町にいくと、砂で家がすこしうまっている所や、ほぼ一かいがうまっている所などがあり、人々はいっしょうけんめい、その砂を道に出していた。

ぼくは、こんなひどい水害にあったことがなかった。

こんな、水害はもうないだろうと思う。

家・砂・石

一C 庄司志賀

昭和四十六年九月十日午後四時二十分ごろ、新開地を、おそって、人々の命をうばっていった山津波。

人々の命をうばっていったその中に、中学生も入っているとは夢にも思わなかった。

中学生とは、メイ子さんと、岳洋君だった。

メイ子さんとの思い出は、たくさんある。ソロバンに行くときも、いっしょにいった。じゅくにも、いっしょにいていたときもあった。夏休みいっしょに卓球をしたこともあった。

千ミリをこす雨と、二～三日前に台風が来たために、じばんがゆるんでいたのが原因である。これからも少しの雨で注意をしなければならない。集中豪雨は古江町、いえ輪内の人を不幸につきおとした。

「アッ。」

と、いうまに新開地をおそった、山津波。メイコさん、岳洋君、あなたたちは家の中で、テレビをみていたかもしれません。それがきゆうに、家、砂、石がのっかってきたとき、苦しかったでしょうネ。

これから生きる長い人生をなくして、メイ子さんも、これからお嫁に行くことを夢みていたでしょう。岳洋君も中学生生活を終わろうとしているときに……。

山津波は、津浪よりおそろしい。

私たちは、はじめてこんなことになった。今からもどんなことが、あるかもしれない。でも、気をつけていこう。

美奈穂さんも、だいぶん、けがをしている。

集中豪雨のために、人の命をうばっていった、山津波なんて、もう、あつてほしくない。

覚悟をきめた夜

二 B 森 岡 孝 子

九月十日、その日学校は午後から休みであった。

家へ帰って横の川をみていると、川のみずはどんどんふえてき、とうとう橋を少しのりこえるぐらいになった。

お父さんは、船を見に行っていた。

私は、前の家はあぶないので、ばあちゃんをこっちの家へつれてきた。

その時、船はもうなかった。

その後、川から変なおいがするので、にげてきていた親せきの人達と見たら、川の水はまっくろだった。

お母さん達は、どっかがくずれたなと言っていた。

四時ごろだった。ドドーという音といっしょに、木や、木の根っこなどが沢山流れてきて橋へつまった。

それと同時に、水が私の家の方へおしよせてき、私はばあちゃん達と上の親せきの家へにげた。

お母さんは、つまる前に買物にでたあとだった。

お父さんは前の橋の所にいたので、流れ出した水や材木に流されたのではと心配した。でも、お母さんとお父さんが後から上へにげてきたのでほっとした。

まだ明るいうちに古江がくずれて、犠牲者を出したことをききびっくりした。

それから夕食をし、その後も皆で山崩れの話ばかりしていた。

ばあちゃん達は、わたしに寝よといったけど、とても寝られるものではなかった。

十一時頃だった。突然、ゴーッというものすごい音がし、みんなとび起きた。

どうも東の方であった。

最初西がくずれ、次に東がくずれたのだとすると、今度は私達の番だと、生きてここちもしなかった。

でも、にげると言ったって、暗いし、どこへにげていいかわかりもしなかった。

おとなたちは、ここでだめだったら、どこへ行っても同じだから、もう覚悟をきめよ、と言っていた。

みんな青い顔をしていた。

朝二時ごろやっと雨がやみ、みんなほっとした。

電池をつけて、上から自分の家を見ると、大分うまってしまっていた。

明るくなって又家を見ると、川の方が道より高くなっていた。

でも家が流されなくて、ほんとうによかった。

はだしでとびだして

一 B 庄 司 加 保

あの日、昭和四十六年九月十日、正午四時二十五分、十三人の人を失った。

思いもよらぬ、山津波で、一 B の学友も失った。

あさ、二人がよびにきて、じょうだんなどをいって、三人で通えることは、ないのかと、思うと……。

私は、その日、家に帰りテレビをみて、楽しんでいた

まさか、山津波がくるとは思っても見なかったのだ。だれもが、そうだと思う。

新開地は、雨がふると、小学校の横のみぞに水がたまり、家がつかることがあるので、それをみんな心配していた。

私の母も、それを心配し、水を見に行っていたので、私は家の中にいた。

すると、母の必死なよぶ声がするので、はだしで、とびだした。とたんに、

「ゴー。」と、という音がして、どろ、石や水が、たきのようになってくずれ流されてきた。その間に家はない。

ほんとうに「あっ。」という出来事だった。

私は、ブルブルふるえながら、新開地の人々のところへ行った。みんな、はだしで、とびだしてきている。

利枝子ちゃんと、多美子さんところへ行った。

それから、メイ子と美奈穂のことが、心配になった。

外で、ミー子が何とかなどという、耳をそばだてた。

そして、次の日に、見に行くと、いそのようになっていた。

まさか、これまでに成るとは、夢にも思ってもみなかった。

このいそのような石と石の間で、メイ子や他の人がうまっていると思うと、胸が、ぐっといたみ、熱いなにかが、こみあげてくる。

ほんとに、泣いても、泣ききれないくらいむごい事である。

もう、こんな出来事は、一生おこってほしくない。

運 命

二A 大 川 聖 子

九月十日、その日、午前中授業にして、私たちは帰った。

その時、午後の山くずれのおそろしさも知らず、授業がないという事を喜んだ。

それは、メイ子も、岳洋君も同じだったのだろうか。

これからという年齢のふたり、罪もない二人はなぜ、死ななければいけないのか。寿命、運命、というもののおそろしさというものを知り、気のどくで、かわいそうで、ならなかった。はじめのうちは、信じられなかった。

あの日、家に帰ると、いつものとおり、母は、工場へいていた。

家が川のとなりなので、川の流れの音がすごく、石も水に押されてまくれるので、ぶきみな音であった。

家へついたのが、一時四十五分ごろだったが、下水がつまったので、水がうらにまわって池のようになっていた。弟が母を呼びにいて、母がきてから、工場は終わったようだった。

時間がたつにつれて、風雨がつよまり、私もだんだん不安になってきた。

親せきの人呼びにきてくれたので、私達はひなんした。

ひなんした親せきの家のかいで、川が心配だったので外をみていたら、そのとき、てい電した。

それから、少したったら、淳木とこのおばちゃんが気ちがいのように、泣きさげびながら、走ってきた。子供のことをさげんでいた。

私は、なんだろう思っていたら、パトカーがきて、親せきのうちからすぐみえ

る道路にとまった。そして次々と新開地に住んでいる人たちが、どろまみれで、にげてきた。私は何かがあったんだろうと思う気持ちしか覚えていない。

それから、おじさんやおばさんが、カップをきて、助けるのに、道は行列になった。

その十日の日に、昭彦がみつきり、医者へつれていった。でも、すぐ尾鷲の病院にいけなかったので、手おくれになって、死んでしまった。

私は、いたい、いたいといいながら死んでいった昭彦がかわいそうでならなかった。あと、さえおばちゃん、まちほちゃん、明子おばちゃん、強子おばちゃん、いさおばちゃん、みふちゃん、雅文さんは父のいところにあたる人だ。

岳洋君、メイ子、淳木、りさちゃん、幼い子から、おばさんまで、十三人もの人が犠牲になった。

私は、知っている人ばかりなので、悪い夢でもみているようだった。

私は、今でも、自分の家の前の道が川のように水がたまった、集中豪雨のおそろしさを覚えている。

きょうふの思い出

一 A 伊原雅彦

九月十日、午後五時三十分ごろ（三重県尾鷲市賀田町）

十日の授業は昼までだった。

ぼくは家にまっすぐかえった。その帰り道、水が道にあふれていた。

「早く家に帰ろう。」と、思っていそいで帰った。

家に帰ってから大工道具をいじったりたり、いろんなことをして遊んでいたが、「てい電しているから、くらくならないうちに、ごはんをたべとけよ。」と、おかあさんがいったので、すこしたべた。

水が気になって、前の川をみていた。

「水がだいぶふえたな。」と、おかあさんたちとはなしていた。

そのとき、「ゴー!!」と、音がきこえた。ふっとみると線路の上で、人がてをふっている。

「なんだろう。汽車かな。」と、思ったとき、「バキバキッ」と、木の折れる音がした。戸をあけて上をみてみたら、電線がゆれ動いて、電柱がたおれていった。

まもなく家がながされていった。ななめ下の家がたおれかかった。

ぼくは、「こっちにもくるぞ!!」と、言って、なんにももたずに、すぐ上に走っていった。とちゅうにはどろ水が道の流れっていて、その水がものすごくへんなにおいがした。

上にでたときは、服は上から下まで、どろできたなくなっていた。

その夜ぼくは一時的にノイローゼみたいになっていた。

家が、どしゃで流されていくのをみているからだ。そしてその音が、耳のそこ
にこびりついている。

だから、ひなんした所の横の川の水の音が、山つなみの音のようにきこえた。

そうしながらも、尾鷲へ行っているお父さんが心配だった。尾鷲は、日本で一
番雨がたくさんふる所とされているからだ。

今、こうして感想文をかいていると、九月十日、午後五時三十分ごろの山くず
れが目にかんてくる。

そして、この思い出は、一生わすれることのできない思い出となることにちが
いない。

集中豪雨の恐ろしさ

一 A 榎本政則

ぼくははじめて災害の恐ろしさを知った。

九日から降りはじめた雨は一日中降って、十日になってもやまなかった。学校
は昼から休みになった。いつもよりちょっと強い雨ぐらいだと思った。

川やみぞ、道などを見て体がゾーと寒くなった。川は水がどろで黒くにごり、
みぞやいたる所から水があふれていた。

しかし二日も降りつづいていたのだから、もうやむと思った。

ところが夕方になって雨はますます強くなり、川は今にも水があふれそうだ
った。そうしているとドドーと大きな音がして橋にいくつも大きな木がとまり、み
ずは川をまっすぐに流れず、横へ横へと流れはじめた。

ぼくははじめて恐ろしい山つなみを見た。体がガクガクふるえてきた。その時、
はんしょうが、ガンガンと鳴りはじめた。

どろ水はどんどんふえ、小さな家は横へ流され、もうすぐ屋根までつかりそう
だ。あたりいちめん、どろと木の強いにおいがしていた。

夜にはいつて、もうやむかと思っていたが、雨はいつこうにやまない。それに
停電しているので、よけいに不安になってきた。

十一時前ぐらいから、雨はやっとこぶりになったので、安心してねられた。そ
れまでろうそくをつけ、何もしないで、ただすわっていたのだ。

しかしちょうど十一時ごろだった。東の方でドドーと音がした。ぼくは生きた
ここちがしなかった。外へとび出した。

近所の人が話をしていた。みんな東の方がくずれたことはわかっている。しか

しどころがくずれたのかわからないのだ。東の方にしんせきがいるひとはひどく心配した。

大人の人が行こうと思っても道は水が、一メートル近くの深さになっていて歩いてはいけないし、どこがどうなっているかわからない。しかし、行ってきた人がきて話をしてくれた。

くずれた所はわかったが、どうなっているのかわからない。岡田医院を見ると、たくさんの方が行ったり来たりしていた。パトカーは通れる道を何回も行ったりきたりしていた。

はっきりしたことが何もわからないまま不安な夜が明けた。そとは信じられないようなことがおこっていた。ほんとうに山津波の恐ろしさをみせつけられた。

古江と賀田で死者二十六名、ぼくたちの中学校で死んだ人が二人。その他におとうさんやおかあさんが死んだ人もいる。ほんとうに信じられないことだ。

こんなことは二度とおこってはいけないと思う。

しかし、天災というものは、いつやってくるかわからないのだ。

夢であればいいのに

一 C 大 川 真理子

昭和四十六年九月十日、午後四時二十五分ごろ、近所のおじちゃんが、「山津波やあ。」と、おめきながら、私の家の所に来た。

お母さんが「どこが。」と、聞くと「新開地やわよ。」と、いってあわてていた。

おじちゃんは、四人の子どもをおいて新開地へ見に行った。私たちは、おろおろしていた。

やがて、おじちゃんが来たので、お母さんは、たずねた。

「どうやった。」

「みんな全めつやわよ。」

その言葉を聞いて、お母さんは、おくへ、しらせにいった。

新開地に、親せきがいたので、心配していました。いてもたってもいられないので、恵里さんの所の前にきたとき、どこかのおばちゃんが、

「はよ、かかあちゃんのきがえ持っていったらんか。」

と、いったので、家にとりに来て、医者やにいった。

そしたら、おくのおばちゃんが、「さえおばちゃんとまちほが、死んでいたわよ。」と、いって泣いていた。

昭彦は、と試してみたら、大丈夫だった。あまりのショックで、なみだ一つでなかった。おくのおばちゃんが、「まちほは、みいおばちゃんところにいとるわ。」

と、いったので、みいおばちゃんところに行きました。

そしたらみんな泣いていました。私と姉も泣きました。

それから、家に帰ろうとして、恵里さんの所の前までいったら、お母さんが泣いていました。家に帰って、恵里さんところにねかしてもらいました。

お母さんは、床に入っても、ただ泣いていました。へんな音がするとみんなびっくりしていました。

私は、十三人も死んだので、夢を見ているようです。

今も信じられません。

集中豪雨の足跡

三 A 浜 中 輝 一

昭和四十六年九月十日金曜日、この日は一生僕の頭に、いや、賀田、古江の人達の頭に残るであろう一日である。

この日は朝から強い雨が降っていた。

そして僕達は、六時間の授業を四時間で打ち切って家に帰ることになった。

僕は今はなき岳洋君と他二・三人と友達と語った。

これが彼と会い話した最後であった。

今思えば、もう少し彼に親切にしておけばよかったと思う。

家に帰ると、川がもう少しで切れそうであった。

それから三・四時間たって、夕食時に「バリバリ」やら「ゴロンゴロン」という音とともに、石や木が川の橋でつまり、水があふれだしてきた。

僕達は、あふれ出した水の中を重要書類を持って、元の小学校へ行く道を走った。

逃げているのは、僕たちだけじゃなく、川の近くの人達全部が上の安全な所へと避難した。

やっと落ちついて川の方を見ると、水があふれ出て川の近くの道という道は、全部川に変わってしまった。それを見ると全身が震いでとまらなかった。

避難する人の中には、鶏やガラス戸を持って上がってくる人がいた。

僕は「家が大丈夫ですよに」と願った。願うしか僕達にはどうすることもできなかったのである。

それから父が一番安全だといい、僕も思っていた西の祖父の家に行った。そして夕食の食べなおしをしていると、

「ゴオーッ」

という奇妙なものすごい音がした、僕はびっくりして外にとびでると、道の所を

ドロや小石が流れて来た。じ

僕は何がなんだかわからないが、東に向かってその道を走り、途中でその道から上の道へと走り、上の道を振り返らず父の所へ走った。

父はすぐに事故現場へ行った。

後で僕と一室にいた祖父達もみんな無事だった。しかし本家にいたお婆さんだけ不明だと聞いてびっくりした。

この日は、あの山津波がどの程度のものか、又山くずれか、がけくずれかさえはっきりわからなかった。

そしてその日は、「ゴロンゴロン」「バリバリ」「ゴオー」という音が頭の中にこびりついて、不安な一夜を過ごした。

あくる日は、昨日の雨がうそのように思われるぐらい好い天気だった。

そして事故現場へ行き、ものすごさにびっくりした。

その時、僕の耳に好いニュースが入ってきた。お婆さんが見つかри、生きていたという。

それから家に帰った。

家の前と横の道は川になり、川が石や木で、ガードレールよりも高く積もっていた。いわゆる海拔ゼロメートル地域であった。

庭は、ブロックのへいが倒れ、中は床上までドロでいっぱいだった。

それから毎日、清掃がはじまった。

この恐ろしい集中豪雨は、各所にいろいろな足跡を残して消えてしまった。

雨量は一〇九〇ミリだと聞いた。

これによって、小・中学生の幼い命もうばわれた。

その中には、我々の中学校からの二人の犠牲者も入っていた。

その一人が三Aの級友、大川岳洋くんだ。

彼がこんな短い一生で死んでしまうなんて誰も夢にさえ思わなかったことです。

今でもまだ、彼が死んだなんて夢のような気がします。

これから先、再びこのような悲惨な事実をおこさないようにしたいものである。

また、これと同時に、天災の恐ろしさをしみじみ考えなければならない。

救 援 あ り が と う

次の方々からお見舞いのお金や物を頂きました。

この温情は永久に忘れないでしょう。本当にありがとうございました。

(敬称略) (順不同)

- 伊勢市立宮川中学校生徒会
- 津市立橋南中学校生徒会
- 久居中学校生徒会
- 尾鷲市立梶賀小学校児童会
- 海山町立島勝小学校児童会
- 伊勢市倉田山中学校有志
- 美杉村立八幡中学校
- 岐阜県羽島群笠松中学校生徒会
- 南勢総合高等職業訓練校生徒会
- 四日市市諸岡逸子
- 小倉商会
- 四倉薬品
- 尾鷲婦人会
- 長島海洋少年団
- 岐阜県大野小学校
- 宮の上小北浦地区児童会
- 尾鷲市、海山町、長島町の各小中学校児童生徒
- 向井小学校 PTA、尾鷲小学校 PTA
- 東海金型 ・熊野工専 ・まさみ書苑
- ウチヤマスポーツ店 ・コイケ商事
- 日本旅行会 ・群市 PTA 連合会
- 市校長会
- 名古屋ボーイスカウト
- 早川写真館
- 三重県共同募金

この他多勢の方のあたたかいご支援をいただきました。重ねてお礼申し上げます。

三時間もうまっていたわたし

一〇 大 川 美奈穂(県立病院にて)

九月十日、忘れようとしても忘れられない日

思い出したくない事ばかり……。

あの日、私はホーズでかけられるような雨にびっくり、川の石がゴロゴロといていた。

兄ちゃんも母も私だけがちゃんのところにおいて、家の水などをおじちゃん、おばちゃんなどに見に行っていた。

それから一息ついているところに、ゴオーゴオーというものが、ものすごいいきおいでとなりの家をいっしゅんのちにくずしていった。

それを見て、一秒もたたないうちに、私も土砂にうまってしまった。

目の前が暗くなり、だんだんさむくなってきた。その時はとてもこわくて、一生けんめい「助けて、助けて。」とよびつづけたけど、だれもきてくれなかった。

それからだいぶたってから、人の声が聞こえてきたので、力いっぱい助けをよんだ。でもすぐには助けてくれなかった。

水や砂が石をとるとながれてくるからだ。

そして、その間約三時間もうまっていたのです。

足もひどくけがをしました。

でも、命が助かっただけ、足がいたくても、がんばらなだめだと、母や兄ちゃんのことを思うと、そう思います。

今は足もだんだんよくなり、あとすこしというところです。

もう二度と、こんなことがおこらないようにと思います。

編 集 後 記

二B 大 川 康 祐

ぼく達、後期文化委員会は、前期文化委員会が提出した昭和四十六年九月十日の災害文集を編集するためにうけついだ。後期文化委員会は十一月十日から仕事に取りかかりました。

まず最初にやった仕事が、題名を決めることで、話し合った結果、全校生徒から題名を募集することにしました。

募集した結果、相談しあっているいろいろ題名としてよいものを選びだし、その中で一つ決めた題名は“悲しみの集中豪雨”という題名でしたが、考えてみると、どこか一つたらないような題名でした。

二つ目の仕事は、各クラスから提出してくれた作文を、災害文集として印刷に出すため、別の紙にまとめることで、いらないところは省略したり、一つ一つの作文の題名が悪いと書き直す仕事です。まとめることは簡単に進みましたが、題名を書き直すことは複雑でやりぬくかったです。それで、先生に協力してもらって題名を書きなおしました。

災害文集をまとめにかかっていく日か立ってから、賀田地区の災害を受けた被害者の家々に先生と文化委員の者とで聞きがきに行きました。聞いていて被害者の言葉や輪内中の災害にあった被害者の学生の作文をいれて、ほんとうの災害文集ができたと思いました。

又、次の日から災害文集のまとめにかかりました。やはり、前と同じように、いらないところは省略したり、題名が悪いと先生に協力してもらって書きなおしたりして、十二月中旬にまとめもようやくおわりました。

四つ目の仕事は、まとめた災害文集を編集することです。文集を三つに分類してみました。一つ目に被害者の友達について、二つ目に九月とかの夜について、三つ目は九月十日の自分の行動や記録に分類して組み合わせにとりかかりました。文集の組み合わせは一年の女子がくれば、二年の男子、二年の男子がくれば三年の女子と、学年別に男女交互にして組み合わせましたが、男女の数があわず、学年別の女子と女子、同じ学年の女子と女子などがあつてうまくいきませんでした。

編集にとりかかってから二十二日、古江地区の災害を受けた被害者の家々へ、三つ目の仕事と同じく聞きがきにいきました。一・二軒聞いて前と同じようにやはり災害文集としての実感を感じました。

冬休みにはいる前に仕あげようとしたのですが、できず十二月二十七日に学校へ委員長と副委員長とで編集の仕上げに行きました。副委員長と協力しあつて

仕上げましたが、やっている途中、われわれの学校から二人の犠牲者を出したため、これからもこのような災害がおこらないように祈り、これからこういうことがあって、この文集がその日まで残っていればどのようにしたか参考になると思います。

印刷所には三学期の初めに一月中旬十四日にもって行って印刷してもらいました。

この文集を作るにあたって協力してくれた多勢の方々に心からお礼申し上げます。突然お邪魔しながら、親切にお話をいただいた被災者住宅の方々、本当にありがとうございました。一日も早く元気になられることをお祈り申し上げます。

悲しみの集中豪雨

印刷 昭和四十六年二月 十五日

発行 昭和四十六年二月二十一日

発行 尾鷲市立輪内中学校

編集 文化委員会

委員 大川 康 祐 大川 つがる

奥地 寿美保 村上 尚 美

大川 み ゆ 大川 俊

印刷所 尾鷲印刷